

在米日本婦人

在米國 西山 愷 治

日本婦人にして米國に來るもの年と共に加はる然れども其の最も多きは加州殊に桑港附近を第一とし次はシヤトル附近とす、彼等は其の職業によりて凡三種に區別せらる。

- 一、主婦として來れる者、
- 二、學問を目的とする者、
- 三、勞働を目的とする者、

一、米國にある日本婦人中主婦と名けらるゝものに三種あるを知る、即ち一は日本内地にあると、きより已に結婚の式を擧げて此地に來れるもの、其二は此地に於て結婚せるもの、第三は結婚すべく來れる者なり。日本内地より已に結婚して來るものは稀に見る所にして又往々米國に於て結婚の式を擧げしものなしとせず、第三の結婚すべく來る者は近年の一流行にして所謂寫眞結婚最も多

し、吾人が在米日本婦人に望むところあらんとするは實に此の三種の在米主婦なる人にあり、彼等は良夫を有し或は最愛の子を有す米國憲法は日本人の歸化を許さず、然れども米國生兒 (Natural Born) に對して此れを拒み得ざるなり、吾人は我が歸化權が對等國際交渉によりて得られずとすれば或は此の方面より獲得するの止むを得ざるを知ればなり、其の日本人排斥の聲の如き若し日本人が撰擧權に有せば恐らくは聞かざる所なるべし然れども惜むべし我に歸化の權利なく又撰擧に預る資格なし、吾人は善良なる在米日本人の主婦によりて米國の土地に擧げられし其の健兒をして生育せし撰擧權を取得するの益々多からんことを望んで止まず、此の重且大なる責任を有する日本婦人が第三に擧げし寫眞結婚に依るの甚だ危険なるを叫ばざるべからず、所謂寫眞結婚なるもの、甚だ大膽にして而も之に危険の伴ふものあるを思はざるべからず、吾人が渡航の船中見聞せし某

々女の如きは單に一片の知人の紹介と一葉の寫眞とを以て萬里の波濤を越えて此地に相會せんとす其の意氣や熾にして強し、然れども思へ結婚は人生の一大事にして容易に事を決して一幕の痴事を演ずべき者ならざるのみならず、如上の大責任を有する主婦にして此の輕舉あるは寔に惜むべきことなりとす、在米邦人の多くは働さに疲れ主婦の慰藉を乞ふもの西に東に充ち満てり、主婦が彼等を輔けて共に米國の天地に大に爲す所あらしめ、我國家に貢獻するの雄々しき大神を有し給ふ余が尊敬せる日本婦人は今少しく自重せられんことを希ふて止まず。

吾人は所謂寫眞結婚せんとてシャトルに着き所謂花聲の來らずして船に待つこと旬日上陸さへ許されず、遂に手を空うして送還せられしものあるを見、又吾人は所謂寫眞結婚を實行して良夫を高買ひせし爲め失望の日を暮すうちに良夫には見捨てられ汚はしき社會の底にまで押落されし可憐

なる日本の女子ありしを耳にせり、此に於てか吾人は我が尊敬せる日本婦人の爲めに結婚の甚だ壯嚴なるを要し、毫も輕躁早斷の擧なきを希ふ爲め幾萬言を弄すとも此れを繰返さで惜からざるなり、教育あり、自重あり、意志強き健全なる日本婦人の來つて在米日本男子をして輔け婦人自身も此地に修養して女子の地位を高められんことを祈る。

二、學問を目的とする者、夫れ米國は自由の國にして女子を尊ぶこと厚く切なるが故に女子教育の道亦夙に開け幾千の女學校も爲めに狹隘を告げ男子の大擧へまで押掛くる傾向あるは熾なりといふべし。女子にして政治學を修め國際法を論じ撰擧問題を口にして政治上の意見を路傍に演説するが如きは敢て日本に見る能はざる現象なりとす、日本婦人にして米國大學に學ぶもの數多しと雖も多くは自活勉學せるものにして東京にある女學生とは聊趣を異にせり、而して米國の地や日本の女

學生を遇するに親切倒らざるなく夏季四ヶ月の家
庭勞働に於て優に一學年を支ふる學資を得せしむ
ること容易なり、然れども日本婦人にして未だ此
地に學ぶもの甚だ稀なり。

三 勞働を目的とする者 米國に止まる三年初
めはお早うの挨拶も出来兼ねて眼に笑みの身振位
にて意志を表示するに過ぎざりし程にして早くも
千弗(我二千圓)を貯へたるものあるを聞く彼等
は骨身惜まざる働くが故に主人に愛せられ、心身は
强健に、主人より英語の教授を受け、時に主人と
共に教會に入つて技師の講話に宗教道德問題を聽
く、意志強き女子は勞働して成功せざるもの殆ど
なかるべきを信ず、然れども金の得易き丈けに其
れ丈け金錢を浪費し、精神の修養足らざる人の常
として精神的快樂を求むるを知らずして肉体的快
樂に耽らんとす、惜むべし時に貯蓄空うして正業
にあるを屑とせず、心身怠慢爲めに醜界に流れて
再故山を見るの顔なきに到るもの皆然りとす豈惜

まざるを得んや。

要するに在米日本婦人が自己の天職の何れにあ
る乎、重大なる責任を帯び、大なる理想を抱きて
此にありし其昔を偲び、渡航の船中意氣太平洋を
呑むの概ありし其の雄々しき大精神をして枯死せ
しめず、益々吾人大和民族をして此地に發展せし
めんことを希ふて止まず。

われ問ひけらく

「人皆の其足もとに寄り行く程も其をみなうし
わるや

たぐい稀れに情も深く且つ
輝きてかくるところなき心か」と

「否とよ百千の人にまざる程

うるはしともなくかしくくもなし、
否れとたゞ彼の女の笑は